

第 23 回東川賞審査講評

海外作家賞 マニット・スリワニチプーン (Manit SRIWANICHPOOM)

国内作家賞 杉浦邦恵 (Kunie SUGIURA)

新人作家賞 今岡昌子 (Masako IMAOKA)

特別賞 山田博之 (Hiroyuki YAMADA)

四半世紀とは 25 年間をさすが、われらの東川賞と東川フォトフェスタは、その四半世紀目の 23 年目である。「継続は力なり」という言葉があるが、東川町における写真文化への取り組みは、もはやわが国の代表的な写真イベントとして広く周知されており、それゆえ例年の東川賞の選考についても、身の引き締まる責任感を感じる昨今である。

本年度の東川賞選考会は今年の 2 月に東京で開催されたが、審査委員に若干の異動があったことをまず報告しておきたい。まず、永きに渡って審査委員を務められた写真家の長野重一氏が退任され、代わって写真家の野町和嘉氏、東京都写真美術館の学芸員笠原美智子氏が新たに審査委員に就任され、先般の選考会より審査に参加された。なお、岡部あおみ委員と杉浦康平委員は海外出張のために欠席されたが、筑紫哲也、山岸享子、佐藤時啓、平木収各委員は例年通り審査に臨んだ。

本年度の東川賞海外作家賞候補の対象地域は修好 120 周年の友好国「タイ王国」とし、審査委員会から平木が 1 月上旬にタイ国の首都バンコクに赴き、現地調査を行った。

その結果判明したことは、今日のタイ国ではさほど広範な写真芸術活動は展開されてはいないものの、国立のチュラルゴン大学美術学部には映像芸術のコースも設けられていて、確かな活動実態があるということだ。そのチュラルゴン大学で映像制作の指導にあたっているカモル准教授が調査に協力をしていただき、数名の候補が浮上、その成果を持ち帰り、審査会に諮った次第である。

本年度の東川賞海外作家賞は、バンコク在住の写真家マニット・スリワニチプーン氏に決定した。氏はモノクローム作品のドキュメンタリーから、カラー作品による大胆なコンセプチュアル表現まで幅広くこなす類まれな技量の持ち主で、国内では地に足の着いた隣人たちのポートレート作品や、社会の不正を糾弾するプロテスト活動支援作品などを主に発表してきた。さらに国内のみならず海外にもその名声を知らしめたシリーズ『ピンクマン』の連作がある。これはピンクのスーツに身を固めた紳士が、大型スーパーマーケットに備えられている大きなショッピングカートを押して随所に出没するというユニークな作品で、消費経済のグローバル化に巻き込まれようとしている世界情勢を皮肉な視点で表現しており、世界各国の現代美術展で話題となった作品である。写真で足元から世界までを考え表現するアジアンアーティストの雄、マニット氏が本年の海外作家賞受賞者である。

東川賞国内作家賞は、例年他の写真賞とはかなり趣が異なる受賞者を選んでいるという感もあるが、それは奇を衒ってのことではなく、写真という手段の幅と奥行きを勘案し、より広い視野をもって写真表現の実態を把握するように努めているからである。

本年度の受賞作家はカメラを使わない写真作品制作者というか、アーティスト杉浦邦恵氏が受賞者である。久しく東京日本橋の老舗写真専門ギャラリーのツァイト・フォトサロン並びに我が国の代表的な現代美術ギャラリー鎌倉画廊を発表の拠点として活躍している杉浦氏は、米国ニューヨークに制作アトリエを構えているが、そのアイデンティティーや活動実績から判断して今年の国内作家賞の授与を決めた。杉浦氏は、森羅万象を印画紙上に形や翳りとして転写し、もうひとつの別の世界を出現させるユニークなアーティストで色彩やインスタレーションにも魅力あふれる斬新さが備わっている。国際的にもきわめて評価が高い杉浦氏の東川賞国内作家賞は、委員満場一致で決定された。

今年の新人作家賞は、行動力溢れるフォトジャーナリスト今岡昌子氏である。今岡氏は 1999 年以降、フリーの写真家として開発途上国や復興支援が必要な国と地域の取材を精力的に続け、ことに戦乱のアフガニстанを、そこに生きる女性たちの逞しい生き様に肉薄する取材などを介し、戦争の理不尽さや生の尊厳を写真展や出版を通じて、積極的に訴え続けてきた。そして最近ではアジアやイスラム圏の果てしない紛争を、臆せず勇気を持って凝視し取材を続けている。しなやか且つ強靱な眼と精神を持つ若手写真家として期待は大きい。

北海道にかかわる写真活動を対象とした東川賞特別賞の本年の受賞者は、山田博之氏である。山田氏は 90 年代の滞独中に写真に接したのを契機に写真を始め 2005 年の 7 月に郷里の旭川にささやかなギャラリーを開設、そのギャラリーの名称『ロマンス』そのものの自作を継続的に発表してきた。シリーズ『ロマンス』『残雪』は彼の愛妻との日々を淡々と綴ったエッセイ風の作品で見るものの心を洗浄する。このつつましく、しかし芯のある愛のあり方や写真の日々は、われわれに忘れかけていたことを思い出させてくれる貴重な存在といえよう。

本年度も東川賞各賞は審査委員一同、胸を張って皆様にご報告できる実を備えていると確信している。

東川賞審査委員会 幹事委員 平木 収

第23回東川賞《海外作家賞》 "The Overseas Photographer Prize"



© Manitto Suriwanichipoom

「ピンク・マンシリーズ」

(Pink Man Series) 2002

マニット・スリワニチプーン (Manit SRIWANICHPOOM)

バンコク在住

1961年タイ、バンコク生まれ。84年シリナカリンウィロート大学視覚芸術学部卒業。

在学中からビジュアル表現に興味を持ち始める。90年バンコク・ドイツ文化センター実験映画ワークショップ1部終了。94年同ワークショップ2部終了。広告の仕事に携わった後、通信社に入り報道写真家としてクメール・ルージュ時代のカンボジアの戦乱を取材。社会を見つめるフォト・ジャーナリストとしての経験は、その後の作品制作の重要な要素となっている。アーティストであると同時に、環境破壊などに対するデモを組織する活動家としても知られる。代表作「ピンク・マン」シリーズは、詩人、アーティストである氏の友人をモデルに起用、現代のタイ社会に広まるコンシューマリズム(大量消費社会)への批評が込められている。

第23回東川賞《国内作家賞》 "The Domestic Photographer Prize"



© Kunie Sugiura

「after Electric Dress B」

(具体派作家・田中敦子の作品

「電気服」1956 に因る) 2001

杉浦邦恵(すぎうら・くにえ)

ニューヨーク在住

1942年愛知県生まれ。67年シカゴ・インスティテュート・オブ・デザイン卒業、B.F.A.を取得。69年ジョージ・イーストマン・ハウス展「視覚と表現・現代写真」に参加。72年ホイットニー美術館「ホイットニー・アニュアル」に選出される。以後ニューヨークを拠点に、フォトグラムによる美術と写真の領域にわたる作品を制作、国内外に活動の場を広げている。

第23回東川賞《新人賞》 "The New Photographer Prize"



© Masako Imaoka

「re·birth」(復活)2002より
「のちにジャーナリストに転身した教師」
カブール、アフガニスタン

今岡昌子 (いまおか・まさこ)
東京在住

1965年神奈川県横浜市生まれ。幼少時に友達や風景にカメラを向けた楽しい思い出を持つ。東レ株式会社に入社、医薬の開発にたずさわる研究部門に勤務。やがて仕事の合間、旅行先で好きな写真を楽しむために写真家のワークショップや写真塾に通いはじめ、ベリーダンサーをテーマに一年間撮り続ける。中東の舞踊にふれたことで、未知の文化、社会への関心を抱き始める。99年、フリーランスの写真家として歩みはじめる。紛争や自然災害に苦しむ国々、復興のために立ち上がる人々の営みを見つめ、近年はアジア、イスラム圏を中心に取材活動を行っている。

第23回東川賞《特 別 賞》 "The Special Prize"



© Hiroyuki Yamada

残雪」(Remaining Snow) 2005より

山田博之(やまだ・ひろゆき)
旭川市在住

1973年北海道斜里郡小清水町生まれ。75年旭川市に移住。92年北海道立旭川西高等学校卒業。94年札幌に移住。97年ドイツ・デュッセルドルフで生活、アカデミーのクラブイベントではじめて写真にふれる。同年旭川に戻り写真館に勤務しながら写真を撮りはじめる。05年7月、自主運営の<gallery ロマンズ>を開設、自作の連続写真展「残雪」を発表するいっぽう、道内外の写真家たちの企画・展示を行っている。受賞作「ロマンズ」「残雪」は妻との出会い、旭川の日々の移ろいや生まれ故郷への旅を重ねてまとめられている。